

ヨウダとベキダの主観性

杉 村 泰

1. はじめに

前稿¹⁾で「ヨウダ」と「ソウダ」の主観性の違いについて考察したのに引き続き、本稿では「ヨウダ」と「ベキダ」の主観性の違いについて考察する。²⁾

一般に日本語の文末表現「ニチガイナイ」_レ、「ヨウダ」_レ、「ソウダ」_レ、「ベキダ」などは、話し手の主観的な態度を表すモダリティ表現であるとされてきた。

- (1) a. 太郎が来るニチガイナイ。
b. 太郎が来るヨウダ。
c. 太郎が来ソウダ。
d. 太郎が来るベキダ。

これに従うと、(1)の「ニチガイナイ」_レ、「ヨウダ」_レ、「ソウダ」_レ、「ベキダ」は、「太郎が来るコト」という命題についての話し手の判断を表したものであるということになる。この構造を図1に示す。

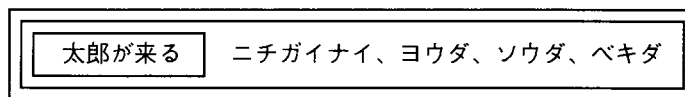


図1 従来考えられてきた文の構造

これに対し、本稿では「ソウダ」と「ベキダ」は命題表現であるとする。その証拠に、「ニチガイナイ」と「ヨウ」が疑問の対象とならないのに対し、「ソウ」と「ベキ」は疑問の対象となるという事実が指摘できる。このことは「ソウ」と「ベキ」が話し手の存在とは独立した客観的な事態³⁾を表していることを示している。

- (2) a. * [太郎が来るニチガイナイ] かどうかを考える。
b. * [太郎が来るヨウ] かどうかを考える。

- c . [太郎が来ソウ] かどうかを考える。
- d . [太郎が来るベキ] かどうかを考える。

したがって、先の(1 a)と(1 b)は「太郎が来るコト」について「~ニチガイナイ」、「~ヨウダ」と推量判断を下した表現であり、(1 c)と(1 d)は「太郎が来ソウナコト」、「太郎が来るベキコト」について「~ダ」と認識判断を下した表現であると解釈される。

- (3) a . [太郎が来る] ニチガイナイ。
- b . [太郎が来る] ヨウダ。
- c . [太郎が来ソウ] ダ。
- d . [太郎が来るベキ] ダ。

さらに、「ソウ」と「ベキ」が命題表現である証拠として、否定に対する違いが挙げられる。モダリティは発話時点における話し手の心的態度を表すため、それ自体を否定することはできない。ところが、「ソウ」と「ベキ」は否定の対象となる。

- (4) a . *太郎が来るニチガイナクナイ。
- b . *太郎が来るヨウデハナイ。
- c . 太郎が来ソウデハナイ。
- d . 太郎が来るベキデハナイ。

こうした事実により、「ニチガイナイ」と「ヨウダ」がそれ全体でモダリティとして機能するのに対し、「ソウダ」と「ベキダ」は「ダ」の部分のみモダリティとして機能し、「ソウ」や「ベキ」の部分は命題として機能すると断定することができる。こうした構造を図式化すると図2のようになる。

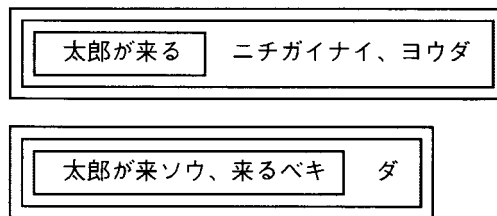


図2 本稿で考えられる文の構造

以上の表現のうち、本稿では「ヨウダ」と「ベキダ」を取り上げ、その主観性の違いについて考察する。

2. 主観性

2.1 モダリティ論における主観性

主観性ということばは多義に使われるが、ここではモダリティ論における話し手の心的態度の現れについて用いることにする。モダリティ論では、一つの文は、話し手が切り取った客体世界の事態を描く「命題」と、発話時点における話し手の心的態度を表す「モダリティ」から成ると考える。⁴⁾ 命題は話し手の存在とは独立に客体世界に存在するものであるため客観的な表現である。一方、モダリティは話し手の心的態度に依存する表現であるため主観的な表現である。

モダリティはさらに、話し手による客体世界の把握の仕方と関わる「命題態度のモダリティ」と、話し手の発話態度と関わる「発話態度のモダリティ」とに分けられる。⁵⁾ この三者の関係は、発話態度のモダリティの中に命題態度のモダリティが埋め込まれ、命題態度のモダリティの中に命題が埋め込まれるという構造となっている。この三者の関係を図式化すると図3のようになる。

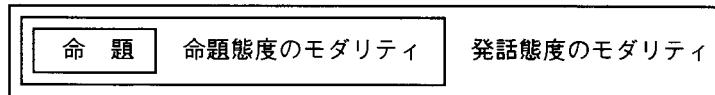


図3 文の構造

たとえば、次の表現は図4の状況で発せられたものである。

(5) かわいい猫だよ!

図4において、話し手は客体世界に「かわいい猫」という対象を発見し、そのことを聞き手に伝えている。この場合に、「かわいい猫」は話し手の存在とは独立に客体世界に存在している。そのため「かわいい猫」は命題として機能する。一方、「だ」はそれが「かわいい猫」であると認識したことを示す主観的な表現である。これは発話時点における話し手の心的態度に依存する表現であるためモダリティとして機能する。また、「よ」は「かわいい猫だ」という判断を聞き手に伝える表現である。これも発話時点における話し手の心的態度に依存する表現であるためモダリティとして機能する。

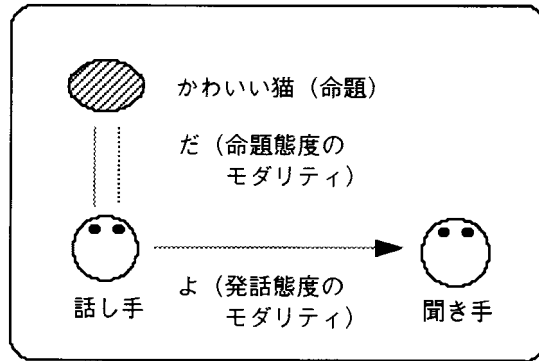


図4 「かわいい猫だよ!」の発せられた状況

ここで注意しておきたいのは、発見の対象となったものを「小さな猫」や「愛らしい猫」あるいは「かわいい子猫」や「かわいい犬」ではなく、まさに「かわいい猫」と捉えたのも、話し手の主観によると言えなくもないということである。しかし、「かわいい猫」は、話し手が客体世界の事態として切り取ったものであるという意味で、本稿では客観的な成分であると考ええる。

2.2 主観性判定テスト

次に命題とモダリティの分類基準について論じる。モダリティは発話時点における話し手の心的態度を表すため、それ自体は真偽の対象とならず、連体修飾成分ともならず、過去文の中にも収まらならないという性質をもつ。一方、命題は客観的な成分であるため、こうした制限が加わらない。そこで、本研究では命題とモダリティの分類基準として、否定の対象となるかどうか(否定テスト)、疑問の対象となるかどうか(疑問テスト)、連体修飾成分となるかどうか(連体修飾テスト)、過去文の中に収まるかどうか(過去テスト)の4つの主観性判定テストを実施する。これらのテストで適格となるものは命題に属し、不適格となるものはモダリティに属すと考える。

ここで主観性判定テストの有効性を「かわいい猫だよ」によって確認しよう。

- (6) a . かわいい猫ではない。(否定テスト)
- b . *かわいい猫だではない。(＼)
- c . *かわいい猫だよではない。(＼)
- (7) a . かわいい猫か?(疑問テスト)
- b . *かわいい猫だか?(＼)
- c . *かわいい猫だよか?(＼)

- (8) a . かわいい猫の目 (連体修飾テスト)
b . *かわいい猫だの目 (＃)
c . *かわいい猫だよの目 (＃)
- (9) a . かわいい猫だった。(過去テスト)
b . *かわいい猫だだった。(＃)
c . *かわいい猫だよだった。(＃)

以上の結果、「かわいい猫だよ」のうち「かわいい猫」の部分は命題に属し、「だ」と「よ」の部分はモダリティに属することが確認された。

このテストで注意すべき点は、一見テストに通過しているかのように見えても、実際にはそうでない場合があるということである。たとえば、(10)は一見「だろう」が疑問の対象になっているかのように見える。

(10) かわいい猫だろうか。

しかし、(10)で疑問の対象となっているのは、「～だろう」の部分ではなく「かわいい猫」の部分である。その証拠に「かわいい猫」と「かわいくない猫」を対比した文は成り立つが、「～だろう」と「～ (無形の確言形)」を対比した文は非文となる。

- (11) かわいい猫だろうか、かわいくない猫だろうか。
(12) *かわいい猫だろうか、かわいい猫か。

主観性判定テストの実施にあたっては、こうした点に注意する必要がある。

3 . ヨウダとベキダの比較

3 .1 真偽判断と当為表現

本節では「ヨウダ」と「ベキダ」の主観性の違いを比較し、「ヨウダ」がそれ全体でモダリティとして機能するのに対し、「ベキダ」は「ダ」の部分のみモダリティとして機能し、「ベキ」の部分は命題として機能することを明らかにする。

一般に「ヨウダ」と「ベキダ」はともにモダリティ表現であるとされている。たとえば、益岡(1987)は「ヨウダ、ラシイ、ニチガイナイ、カモシレナイ、ダロウ」などを「真偽判断のモダリティ」、「ベキダ、ハウガヨイ、テモヨイ、ナケレバイケナイ、テハイケナイ」などを「価値判断のモダリティ」と呼び、ともに「判断のモダリティ」(本

稿でいう「命題態度のモダリティ」)に属すとした。この考え方に従うと、(13)~(15)の下線部は、いずれも「政府は二千円札を発行する」という命題に対する判断を表した表現であるということになる。

- (13) 政府は二千円札を発行する__。
- (14) 政府は二千円札を発行するヨウダ。
- (15) 政府は二千円札を発行するベキダ。

しかし、(13)(14)と(15)では文の構造が異なっていることに注意したい。それは、(13)と(14)が「政府は二千円札を発行するかどうか」という問いに対する答となるのに対し、(15)は「政府は二千円札を発行するベキかどうか」という問いに対する答となるためである。「 」と「ヨウダ」と、「ベキダ」とでは主観性に違いがあるのである。この点については3.2節で分析する。

さらにもう一つ注意したいのは、「 」と「ヨウダ」が「確言」と「慨言」という推量判断内部での対立となっているのに対し、「 」と「ベキダ」は当為表現⁶⁾内部での対立ではなく、「非当為表現」と「当為表現」の対立となっている点である。当為表現内部での対立を問題にするならば、「ハウガイイ」や「ナケレバイケナイ」などと比べる必要がある。

- (16) a. 政府は二千円札を発行するベキダ。
- b. 政府は二千円札を発行したハウガイイ。
- c. 政府は二千円札を発行しナケレバイケナイ。

「 」と「ベキダ」は、「 」と「ヨウダ」のようにパラディグマティックな関係にあるのではなく、シンタグマティックな関係にある。事実、「ベキ」や「ハウガイイ」などの後には、「 /ダ」⁷⁾、「カモシレナイ」、「ヨウダ」などを続けることができる。この点については3.3節で分析する。

- (17) a. 政府は二千円札を発行するベキ-ダ。
- b. 政府は二千円札を発行するベキ-カモシレナイ。
- (18) a. 政府は二千円札を発行したハウガイイ- 。
- b. 政府は二千円札を発行したハウガイイ-ヨウダ。

益岡(1987)自身も、「 」等を取らないゼロの形式は、価値判断についてはこ

れを不問に付するか、或は、保留することを表す」(p 34) と述べてはいる。しかし、結局はこれを「理念」と「現実」の対立と考え、「確言」と「慨言」の対立に平行したものとして説明している。

それでは、「確かさ - 不確かさ」の対立と「現実 - 理念」の対立とは、全く別々のものであろうか。私見によれば、これらの対立の間には、注目すべき共通点がある。それは、基本的には、ある事柄を「現実的なもの」と認定するか「現実的でないもの」と認定するか、という点の対立であると思われる。(益岡1987 :38)

しかし、ここまで抽象化して「真偽判断のモダリティ」と「価値判断のモダリティ」に共通性を見出す論法には無理がある。以下の考察からも明らかのように、両者は異質なものとして考えるべきである。

3.2 主観性の比較

本節では「ヨウダ」と「ベキダ」の主観性の違いを主観性判定テスト(否定テスト、疑問テスト、連体修飾テスト、過去テスト)によって確かめる。

まず第1に、「ヨウダ」は否定の対象とならないが、「ベキダ」は否定の対象となるという違いがある。「ヨウダ」が否定の対象とならないのは、これが発話時点における話し手の推量判断を表したものであり、真偽の対象とはなりえないからである。

- (19) a . *政府は二千元札を発行するヨウではない。
- b . 政府は二千元札を発行するベキではない。

逆に否定の「ナイ」を「ヨウダ」や「ベキダ」の内側に持ってくると、「ヨウダ」の文が適格となるのに対し「ベキダ」の文は非文となる。

- (20) a . 政府は二千元札を発行しないヨウダ。
- b . *政府は二千元札を発行しないベキダ。

こうした事実は、「ヨウダ」の前接部分には肯定・否定(極性)が分化するが、「ベキダ」の前接部分には肯定・否定が分化しないことを示している。すなわち、同じ「政府は二千元札を発行する」という形でも、「ヨウダ」の前接部分と「ベキダ」の前接部分とは性質が異なっているのである。⁸⁾

第2に、「ヨウダ」は疑問の対象とならないが、「ベキダ」は疑問の対象となるという

違いがある。「ヨウダ」が疑問の対象とならないのは、これが発話時点における話し手の推量判断を表したものであり、真偽の対象とはなりえないからである。

- (21) a . * 国民は政府が二千元札を発行するヨウかどうか判断した。
- b . 国民は政府が二千元札を発行するベキかどうか判断した。

したがって、推量判断の場合には次のように言う必要がある。

- (22) 国民は政府が二千元札を発行するかどうか判断した。

ここで注目すべきことは、推量表現の判断の対象が推量表現を含まない部分であるのに対し、当為表現の判断の対象は当為表現を含んだ部分であるということである。このことから、当為表現が客観的な成分であることが分かる。⁹⁾

第 3 に、「ヨウダ」は連体修飾成分とならないが、「ベキダ」は連体修飾成分となるという違いがある。(23a) に示されるように、一般に推量判断の「ヨウダ」は連体修飾成分とはならない。¹⁰⁾

- (23) a . * 政府は二千元札を発行するヨウナ時が来たと認識した。
- b . 政府は二千元札を発行するベキ時が来たと認識した。

しかし、次のような場合には「ヨウダ」も連体修飾成分となる。

- (24) 禎子は、本多良雄が夫について、もっと何か知っているような直感がした。(松本清張『ゼロの焦点』)
- (25) 「いや、つまるところです。年じゅう、暗いような感じがして重苦しい所です」(松本清張『ゼロの焦点』)
- (26) もっとも、その直後に数百年に一度の大震災が襲ってきたというのは、あまりにも偶然がすぎるような気もするが。(貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』)
- (27) 今年のクリスマスは雪が降るヨウナ予感がする。

これらの「ヨウダ」に共通するのは、後に「直感 / 感じ / 気 / 予感」という話し手の直感を表す表現が続く点である。このうち、(24) のように第三者の心的態度を表したり、(25) のように連体修飾成分となる場合には、命題として機能することが明らかである。しかし、(26) の「気ガスル」や(27) の「予感ガスル」のように、発話時における話

し手の心的態度を表す場合には、「ヨウナ気（予感 / 直感 / 感じ）ガスル」全体がモダリティとして機能する。こうした表現が短縮されて「ヨウダ」一語で表されるようになったものが、推量判断の「ヨウダ」であると考えられる。

一方、「ベキダ」は広く連体修飾成分となる。「ベキダ」の形だと「ダ」に認識判断が加わるのでモダリティのように見えるが、「彼だってやるベキ時はやる」のように「ベキ」の形をとり、話し手の判断を伴わない一般的事実を述べる場合を考えると、「ベキ」が命題表現であることがはっきりする。次の例も同様である。

- (28) 王政復古の際、岩倉、大久保が強調した慶喜の「辞官納地」は、論理的には諸侯すべてに及ぼすべきことであった。(毛利敏彦『大久保利通』)
- (29) 周囲の人の心には、久しく此男の行動を見てゐればある程、あれは信頼すべき男だと云ふ感じが強くなる。(森鷗外『雁』)
- (30) 弔電は葬儀の後、遺族だけが読むべきものだ。(飛鳥圭介『おじさん図鑑』)

第4に、テンスとの関係において次の二つの違いが見られる。一つは、「ヨウダ」と「ベキダ」が過去文の中に収まるかどうかであるが、(31)を見る限り両者はともに過去文の中に収まるように思われる。

- (31) a . 政府は二千元札を発行するヨウだった。
b . 政府は二千元札を発行するベキだった。

しかし、過去文に使われた「ヨウダ」は、過去における推量を表すというよりも、断定を避け婉曲な物言いにした表現であるという解釈が強くなる。

- (32) 母は憲一が三十六歳まで独身だったということにまだ不安を持っているようだった。(松本清張『ゼロの焦点』)
- (33) 野村浩子という臨床心理士は、すでに森谷千尋の多重人格障害についてかなり詳しくつかんでいるようだったし、人間的にも信頼が置けそうだった。(貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』)

事実、(32)は「断定はできないが、まだ不安を持っている様子だった」、(33)は「断定はできないが、すでに森谷千尋の多重人格障害についてかなり詳しくつかんでいる様子だった」という解釈となる。推量判断の「ヨウダ」が過去文の中に収まるようにするには、「～(の)ヨウダと思った」のように引用文の中に入れる必要がある。

テンスとの関係におけるもう一つの違いは、「ヨウダ」の前接部分はテンスが分化するが、「ベキダ」の前接部分はテンスが分化しないという点である。前接部分がル形の場合にはその違いが見えにくい、タ形の場合にはその違いがはっきりする。

- (34) a . 政府は二千円札を発行 { する / した } ヨウダ。
b . 政府は二千円札を発行 { する / *した } ベキダ。

「ヨウダ」の場合、未実現の事態に対する推量判断を表すときは前接部分がル形となり、既成の事態に対する推量判断を表すときは前接部分がタ形となる。一方、「ベキダ」の場合は、未実現の事態に対する当為を表すときは「ベキダ」自体がル形となり、既成の事態に対する当為を表すときは「ベキダ」自体がタ形となる。

- (35) a . 政府は二千円札を発行するベキ { だ / ではない }
b . 政府は二千円札を発行するベキ { だった / ではなかった }

このように、「ベキダ」の前接部分にはテンスが分化しない。先にも指摘したとおり、同じ「政府は二千円札を発行する」という形でも、「ヨウダ」の前接部分と「ベキダ」の前接部分とでは性質が異なっているのである。¹¹⁾

以上の結果、本稿では「ヨウダ」が主観的な表現であるのに対し、「ベキダ」は客観的な表現であると主張する。

3.3 統語的關係

最後に、真偽判断と当為表現の統語的關係について論じることにする。益岡 (1991) によると、真偽判断と価値判断はパラディグマティックな関係にあるとされる。

真偽判断と価値判断は基本的に相互排除の関係にある。一文において、一方を選べば他方は選ばれないということである。これは、二者が蓋然性と当為性という異なる領域に属する事柄を表現することに起因する。このように相互排除の関係にあるということは、両者が範疇的な関係 ('paradigmatic' な関係) にあるということでもある。これら 2 つのカテゴリーに共通して「判断」の名を冠する理由はこの点に存するのである。(益岡1991 :54)

ところが、一方で益岡は、「価値判断の二次的モダリティの形式に真偽判断の形式が接続することは十分可能である」(p 58) と述べ、(36) を挙げている。こうした例

が特殊なものであるならば例外として扱うこともできる。しかし、このような例は(37)~(40)のようにいくらでも存在する。

- (36) オムレツは出来たてをたべるべきだろう。(益岡(1991)より)
- (37) オムレツは出来たてをたべるベキかもしれない。
- (38) オムレツは出来たてをたべたハウガイイにちがいない。
- (39) オムレツは出来たてをたベテモイイようだ。
- (40) オムレツは出来たてをたベナケレバイケナイようだ。

このあたり益岡の説明には混乱がある。益岡は価値判断のモダリティを恒常的に主観性を表現する一次的モダリティの形式(「コトダ」「モノダ」と、客観的表現になりうる二次的モダリティの形式(「ベキダ」「~ナケレバナラナイ」「ハウガヨイ」と)に分類した。ここで、価値判断の一次的モダリティに限り、真偽判断のモダリティとパラディグマティックな関係にあるとするのなら論旨は一貫する。しかし、益岡は一次的モダリティの形式も二次的モダリティの形式も、真偽判断のモダリティとパラディグマティックな関係にあると考えている。その証拠に、益岡は次の(41)(42)を挙げて、「これらの文は、事の適否を問題にしているだけであり、真偽の判断は関与しない」(p.53)と説明している。この説明の「これらの文」には、「コトダ」とともに「ベキダ」も含まれている。

- (41) 清二さんもこれに懲りて、あまり不得手な分野に手を出さないことだ。(益岡(1991)より:上之郷利昭『新・西武王国』)
- (42) オムレツはうちで出来たてをたべるべきだ。(益岡(1991)より:石井好子『巴里の空の下オムレツのにおいは流れる』)

ここで、二次的モダリティの形式が発話時点における話し手の当為の気持ちを表した場合には、一次的モダリティの形式になると解釈することもできる。しかし、その場合にも(37)~(40)のような反例が出る。そもそも、真偽判断と価値判断が相互排除の関係にあるとする考え方に無理があるのである。真偽判断と当為表現はパラディグマティックな関係ではなく、シンタグマティックな関係にあると認める必要がある。

そこで次に、真偽判断と当為表現の関係を本稿で考えるモダリティ構造に則して説明する。

- (43) a . オムレツは出来たてをたべるベキだ。

- b . オムレツは出来たてをたべるベキかもしれない。
- c . *オムレツは出来たてをたべるベキにちがいない。
- d . ?オムレツは出来たてをたべるベキのようだ。
- e . オムレツは出来たてをたべるベキらしい。
- f . オムレツは出来たてをたべるベキだろう。

真偽判断文には、推量判断の関与する「推量文」と推量判断の関与しない「認識文」とがある。「認識文」とはある事態の成立可能性についての認識を述べたもので、確実に成立すると捉えた場合（「ダ/」）、他の事態の成立する可能性もあると捉えた場合（「カモシレナイ」）、疑いをもって捉えた場合（「カ」）がある。「認識文」は話し手の頭の中で発話する「思考文」（「～ナア」など）、あるいは聞き手に向けた発話である「伝達文」（「～ヨ」、「～ネ」など）の中に埋め込まれて使われる。

- (44) a . この宝くじは買うベキだよ。
b . この宝くじは買うベキかもしれないし、買うベキでないかもしれない。
c . この宝くじは買うベキかなあ。

当為表現の「ベキダ」や「ハウガイイ」にモダリティの力が感じられるのは、この「ダ/」、「カモシレナイ」、「カ」の力によるものである。これを図5に示す。

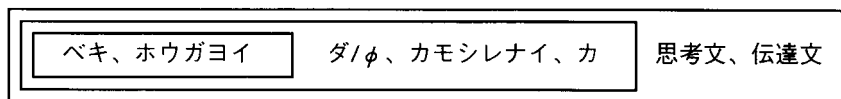


図5 確認文における当為表現の構造

一方、「推量文」とはある事態の成立可能性についての推量判断を述べた文である。「推量文」も「思考文」あるいは「伝達文」の中に埋め込まれて使われる。これを図6に示す。

- (45) a . この宝くじは買ったハウガイイにちがいない。
b . この宝くじは買ったハウガイイようだよ。
c . この宝くじは買うベキらしい。

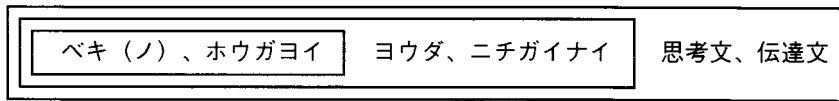


図6 推量文における当為表現の構造

ところで、「ベキにちがいない」という表現は不可となる。これは他の当為表現が、「ホウガイにちがいない/テモイにちがいない/ナケレバイケナイにちがいない/テハイケナイにちがいない」のように適格となるのとは対照的である。同様に「ベキノヨウダ」という表現も不自然である。これも「ホウガイようだ/テモイようだ/ナケレバイケナイようだ/テハイケナイようだ」が適格となるのとは対照的である。この点についてはさらに考察する必要がある。

一方、「ベキかもしれない」は適格となる。一般に「にちがいない」と「かもしれない」は蓋然性の高低を表し分ける表現であるとされているが、両者には単に蓋然性の高さでは説明できない違いがある。事実、「にちがいない」が常に推量判断を表すのに対し、「かもしれない」は(44b)に示すように認識判断を表す。「ベキダ」との接続可能性の違いも、「にちがいない」と「かもしれない」の異質性を示している。

4. まとめ

以上の考察の結果、「ヨウダ」がモダリティとして機能するのに対し、「ベキダ」は「ダ」の部分のみモダリティとして機能し、「ベキ」の部分は命題として機能することが明らかとなった。「ベキダ」は当為という話し手の気持ちと関わる表現であるためモダリティのように感じられるが、主観性判定テストからも明らかのように命題に属す表現である。これは、「うれしい」や「かなしい」や「心配だ」が、話し手の気持ちを表しながらも命題として機能するのと同じである。

注

- 1) 杉村泰(2000)「ヨウダとベキダの主観性」『言語文化論集』第22巻第1号
- 2) 「ヨウダ」には「比況」、「推量判断」、「例示」、「婉曲」の用法があるが、本稿では特に断らない限り「推量判断」の「ヨウダ」を指すことにする。
- 3) 本稿でいう「事態」には、「状態」(state)、「過程」(process)、「行為」(action)を含むものとする。
- 4) モダリティの構成要素として、心的態度、話し手、発話時点の3つがあるとする考え方は、中右(1980、1994)に基づく。「発話時点」は「持続的現在時」と区別して、特に「瞬間

的現在時」を指す。

- 5) 仁田 (1989、1991) の「言表事態めあてのモダリティ」と「発話・伝達のモダリティ」、および益岡 (1991) の「判断系のモダリティ」と「表言系のモダリティ」も同様の観点から分けたものである。
- 6) 本稿の「当為表現」は、益岡 (1987、1991) の「価値判断」、森山 (1989) の「策動的判断〔必要/意図/願望〕」、中右 (1994) の「拘束判断」に対応する。しかし、本稿ではこれらの表現をモダリティとは考えないため、「判断」という言い方を避け「当為表現」と呼ぶ。
- 7) 「 」と「 ダ」は交替形の関係にある。「 」が動詞型活用の語や形容詞型活用の語につくのに対し、「 ダ」は名詞や形容動詞型活用の語につく。
- 8) なお、他の当為表現の場合、「ホウガイイ」と「テモイイ」の前接部分には肯定・否定が分化するが、「ナケレバイケナイ」の前接部分には肯定・否定が分化しない。
 - (i) a. 政府は二千元札を発行{する/しない}ホウガイイ。
b. 政府は二千元札を発行{し/しなく}テモイイ。
c. 政府は二千元札を発行{し/*しなく}ナケレバイケナイ。しかし、いずれの表現も否定の対象に入る点で共通している。
 - (ii) a. 政府が二千元札を発行するホウガイイわけではない。
b. 政府が二千元札を発行しテモイイわけではない。
c. 政府が二千元札を発行しナケレバイケナイわけではない。
- 9) 同様に他の当為表現も疑問の対象に入る
 - (i) a. 国民は政府が二千元札を発行するホウガイイかどうか判断した。
b. 国民は政府が二千元札を発行しテモイイかどうか判断した。
c. 国民は政府が二千元札を発行しナケレバイケナイかどうか判断した。
- 10) 次の (i a) は比況のヨウダ、(i b) は推量判断のヨウダの例である。両者の主観性の違いについては前稿で論じた。
 - (i) a. まるで男のヨウナ女
b. *どうやら男のヨウナ人
- 11) 他の当為表現のうち、「テモイイ」と「ナケレバイケナイ」の前接部分は連用形や未然形であるためテンスの分化はない。
 - (i) a. 政府は二千元札を発行{する/した}ホウガイイ。
b. 政府は二千元札を発行{し/*した}テモイイ。
c. 政府は二千元札を発行{し/*した}ナケレバイケナイ。一方、「ホウガイイ」の前接部分はル形もタ形もくる。しかし、この場合のル形やタ形は、「ヨウダ」の場合とは性格が異なることに注意したい。「ヨウダ」の場合、前接部分がル形の場合は未実現の事態に対する推量判断を表し、タ形の場合は既成の事態に対する推量判断を表す。
 - (ii) 政府は二千元札を発行{する/した}ヨウダ。これに対し、「ホウガイイ」は前接部分がル形の場合もタ形の場合も、未実現の事態を表している。ル形とタ形の違いは、ル形がその行為自体に重点があるのに対し、タ形は行為の結果に重点があるという点にある。したがって、(iii)のようにどちらの解釈でもよい場合にはル形もタ形も使えるが、(iv)のように行為の結果に重点のある場合にはル形が使いにくくなる。

(iii) 海外旅行に行くより日本で温泉めぐりを {する / した} ホウガイイ。

(iv) 頭が痛いときは早く寝 {る / た} ホウガイイ。

なお、過去の事態について「ホウガイイ」と述べる場合には、「ホウガイイ」をタ形にする。

(v) 政府は二千円札を発行したホウガヨカッタ。

参考文献

- 中右 実 (1980) 「文副詞の比較」 国広哲弥 (編) 『日英語比較講座 第2巻 文法』 pp.157 - 219
大修館書店
(1994) 『認知意味論の原理』 大修館書店
- 仁田義雄 (1989) 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」 仁田義雄・益岡隆志編 『日本語のモダリティ』 pp.1 - 56 くろしお出版
(1991) 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房
- 益岡隆志 (1987) 「モダリティの構造と意味 価値判断のモダリティをめぐって」 『日本語学』 第6巻第7号 pp.30 - 40
(1991) 『モダリティの文法』 くろしお出版
- 森山卓郎 (1989) 「認識のムードとその周辺」 仁田義雄・益岡隆志編 『日本語のモダリティ』 pp.57 - 74 くろしお出版

例文の出典

飛鳥圭介 『おじさん図鑑』 (『中日新聞』 サンデー版 2000.7. より) / 臼井儀人 『クレヨンしんちゃん』 双葉文庫 / 貴志祐介 『十三番目の人格 - I S O L A - 』 角川ホラー文庫 / 松本清張 『ゼ口の焦点』 中央公論社 / 毛利敏彦 『大久保利通』 中公新書 / 森鷗外 『雁』 (『鷗外全集第八巻』 より)